國學院大學学術情報リポジトリ

Relations between Musician Honoring Activities and Museums : A Case Study of Taro Shoji and Bin Uehara in Akita Area

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Inoue, Yuta メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000076

音楽家顕彰活動における博物館の関わり

—秋田県出身の流行歌手・東海林太郎と上原敏の事例を中心に—

井上　裕太

はじめに

現代社会は生活の中に音楽が溢れており、街中を歩けば音楽を聴く若者を容易に探すことができるが、彼らの聴く音楽の殆どは近年流行した楽曲であり、自らの生まれる前の歌を好んで聴くという声はあまり聞かれない。「歌は世につれ世は歌につれ」という言葉にある通り、歌は時代を映す鏡である反面、年月が流れれば一時期流行した歌も歌われなくなっていくものであり、流行歌やそれに携わった作詞家、作曲家、歌手は、時間の経過と共に人々の記憶から徐々に忘れられてしまう宿命にある。一方で、音楽家の顕彰活動を行い、次世代までその音楽家の功績を伝える取り組みも各地で行われている。その活動は、博物館における展示、講演会やカラオケ大会をはじめとするイベント等多岐にわたるが、音楽家の顕彰活動について詳細な分析を行った先行研究は散見できない。そこで、本稿では音楽家顕彰活動の事例を紹介し、その内容と課題について博物館の関わりを中心に検討することを目的とする。

本稿では、音楽家顕彰活動として秋田県出身の歌手である東海林太郎と上原敏の事例を取り上げる。東海林太郎は昭和初期から昭和40年代にかけて活躍した流行歌手である。東海林は1898年に現在の秋田県秋田市に生まれ、秋田中学校（現・秋田高校）を卒業した。早稲田大学へ進学後、南満州鉄道株式会社へ就職したが、歌手の夢を捨てることができず退職し、歌手デビューした。歌手として「赤城の子守唄」「国境の町」「名月赤城山」等のヒット曲を出している。晩年は1965年には紫綬褒章を、1969年には勲四等旭日小綬章を、共に歌手として初めて授与され、1972年に死去した[(1)]。

一方、上原敏は戦前に活躍した流行歌手である。上原は1908年現在の秋田県大館市に生まれ、大館中学校（現・大館鳳鳴高校）を卒業し、専修大学へ進学後、栄養と育児の会（現・わかもと製薬）へ就職した。上原は少年時代より野球を行っており、専修大学では野球部主将も務め、就職後も野球部に所属していた。野球を通じレコード会社の関係者と知り合い、それが縁となり歌手デビューを果たし[(2)]、

歌手として「鴛鴦道中」「妻恋道中」「流転」等のヒット曲を出したが、1943 年に召集され、1944 年にニューギニア島で戦死したとされている。

東海林と上原は共に秋田県出身であり、大学卒業後は就職しその後歌手に転身したという共通点を有している。上原は戦死したため活動は戦前のみであり、東海林は戦後も長らく歌手として人気を得ていたため、活動期間に違いはあるが、同地域出身でほぼ同時期に活躍した歌手の比較を行うことで、顕彰活動の在り方について、その傾向を明らかにできると考える。それを踏まえ、本稿では流行歌に携わった音楽家の顕彰活動について博物館の関わりを中心に、その意義と今後の課題について提示することを目標とする。

1．音楽家顕彰活動の分類

音楽家顕彰の取り組みについて筆者は以下の 3 点に大別する。

1 点目は、博物館をはじめとする文化施設における音楽家所縁の資料の展示である。音楽家所縁の資料を展示することで、楽曲だけでなく音楽家の日常の様子や人間性をも看取できるのである。現在我が国には約 30 館の音楽家博物館がある[(3)]が、その多くで楽器や楽譜等、音楽に関する資料の他に、日常生活で使用していた道具類も展示されている。音楽博物館の運営は、自治体が担っているケースや NPO 法人が担っているケース等様々であるが、近年では学校内に卒業生である音楽家の展示室を設け、顕彰を行っている例が散見できる。特に作詞家・清水みのる所縁の資料を展示している清水みのる部屋は小学校内に設置されており、一般に向けた公開の他、児童への卒業生の紹介という意味合いも有している[(4)]。清水みのるは静岡県浜松市出身で、「かえり船」「森の水車」「雪の渡り鳥」等のヒット曲を輩出した昭和を代表する作詞家である。清水みのるの部屋は、清水没後 PTA や地元の自治会から顕彰の声が上がったのに加え、小学校でも空き教室の有効活用の一環として顕彰スペースの設置が検討され、1989 年に開館した[(5)]。小学校内に流行歌に携わる音楽家の顕彰スペースを設けることで、次世代にも音楽家の遺した流行歌や功績を伝承できるという利点がある。

2 点目は、屋外における音楽家所縁の碑や案内板等の設置である。見学者が所縁の地を巡ることで、音楽家の足跡を肌で体感できるという特徴を有している。具体例として、愛知県一宮市の舟木一夫生家跡[(6)]が挙げられる。舟木の生家跡には、筆者の訪問した 2012 年当時案内板が設置されていた。生家跡近辺では、舟木の出身地であることを示す横断幕も街中に掲げられており、訪れた人々が地域と歌手との結び付きを認識できるのである。

３点目はイベントの実施である。イベントとは、音楽家に関する講演会や演奏会等を開催し、訪れた人々がその音楽家に関する知識を得ることができるものを指し、参加者自らが能動的に参画するという特徴を有している。その例として、岐阜県大垣市の江口夜詩記念館で毎年行われる写真展「忘られぬ花」が挙げられる。これは、毎年作曲家・江口夜詩が作曲した楽曲に因み、花をテーマにした写真を一般から募り、応募作品を江口夜詩記念館で展示する企画[(7)]である。単に撮影した花を応募するだけでなく、記念館で展示を行うことで、副次的ではあるものの江口の楽曲と結び付け、花を通じて江口の楽曲を後世に伝える取り組みが行われているのである。「忘られぬ花」は1932年発売の楽曲であり、現在ではこの歌を知らない人々が多数いる。故に、この写真展は江口の楽曲を知らない世代にもその歌を知らしめる役割も担っている。江口はその他にも「憧れのハワイ航路」「赤いランプの終列車」等、一般に広く親しまれている楽曲を多数作曲しており、館内ではそれらの楽曲にまつわる資料をはじめ、年代順にあらゆる所縁の資料が展示されている[(8)]。つまり、写真展で展示作品を募り、館内に展示することで、応募した人々が江口夜詩の楽曲にも興味を持つような仕組みが構築されているのである。

以上のように、音楽家顕彰活動は「資料の展示」「顕彰碑の設置」「イベントの実施」に大別できる。「資料の展示」は、音楽家所縁の資料を通じ、音楽に関する情報は勿論、人間性や内面について多面的に理解でき、人物像をも看取できるという特徴を有している。「顕彰碑の設置」は、実際に生活していた土地に、音楽家との関係性を示す碑を建立することで、音楽家の地域との結び付きを確認できるという特徴がある。また、「イベントの実施」は、イベントを通じて人々に音楽家の功績を知らしめるという特徴を有し、人々が音楽家のことを知るきっかけ作りともなり得るのである。

以上のように、筆者は顕彰活動を３点に大別した。これらを組み合わせることで、顕彰機運をより高めることが期待できるのである。これを踏まえ、第２章、第３章では、東海林太郎と上原敏の顕彰活動についてそれぞれ事例を挙げ、検討を行う。

２．東海林太郎顕彰の取り組み

（１）東海林太郎関係資料の展示

東海林に関する資料を常設的に展示する施設として、まず東海林太郎音楽館[(9)]が挙げられる。同館は東海林の出身地である秋田県秋田市に所在する博物館である。特定非営利活動法人東海林太郎伝承会の運営により2005年に開館し、館内で

は東海林にまつわる資料の展示の他、「生家の玄関先を移築」[10] し実際に木戸をくぐることもできる。展示資料は多岐にわたるが、大きく寄贈者別に大別できる。特に、東海林太郎の顕彰に尽力した中村邦雄氏のコーナーでは、中村氏寄贈の手紙、写真等が多数展示されている。中村氏の寄贈資料は、単に表面的に東海林の情報を得られるものではなく、人間関係や時代性をも看取できるものが大部分を占めている。その例として佐野周二が東海林に宛てた手紙が挙げられる。佐野は昭和期に活躍した俳優であるが、手紙は東海林と佐野の交友関係を示す重要な資料であり、その文化的価値は高い。また、東海林の家族から寄贈された資料を集めたコーナーでは、実際に使用した眼鏡や直筆の楽譜、出演番組の台本等が展示されており、仕事に使用していた資料から直接歌手としての姿を読み取ることができるのである。以上から、単に東海林に関する資料を展示するのではなく、人間性や背景をも看取できる資料を展示していることが解る。また、2014 年には、東海林の妻がかつて所有し東海林が歌手になる前、歌の練習用に使用されたピアノが寄贈 [11] されており、ここから、現在でも展示内容の充実化が計られていることが解る。実際に、2005 年の開館当初の展示資料は「愛用のバイオリン、レコードや全集 CD など約 100 点」[12] であったが、2006 年には、東海林が最後の舞台で着た衣装が「東海林の歌唱スタイルと同じ直立したマネキンに着せ」[13] られ公開された他、2011 年には先述の中村氏の遺品である「SP レコードなどの音源約 1000 点や写真約 1500 枚、楽譜や手紙、さらにはステージ用のチョッキやちょうネクタイなど、（中略）段ボール計約 45 箱」[14] が寄贈される等、開館以来収蔵資料は増加の一途を辿っているのである。また、先述のとおり、東海林は南満州鉄道株式会社に勤務した後、歌手に転身しているが、会社員時代に著した論文も展示されており、展示資料は歌手としての資料から人間性を窺える資料まで多種多様である。しかし、収蔵資料は全 2000 点以上あるが、近年は「息子・娘の代になると資料の価値が分かってもらえない」[15] との理由から寄贈する人が増加しており、展示内容の充実化がなされているものの、東海林太郎の功績の次世代への継承という観点からは課題が生じていることが窺える。一方で、同館では了解を得れば好きなレコードを聴くことや資料に触れることができる。東海林太郎自筆の歌詩集も展示されているが、自由にページをめくり、写真を撮影することも可能なのである。つまり、資料の保存よりも活用を重視しており、直接的に東海林の遺した足跡を肌で感じることができるという利点がある。

また、秋田県立博物館の秋田の先覚記念室においても常設的に東海林の資料が展示されている [16]。ここでは、東海林が実際に使用したバイオリン、「高瀬舟」の歌詞の書かれた直筆の色紙、「国境の町」の自筆楽譜、東海林の吹き込んだレコード

３枚が展示され、年譜と共に東海林の説明がなされている。秋田の先覚記念室では2014年7月27日現在、60名の秋田県出身の人物に関する展示が行われており、その中の一人として東海林も取り上げられている。東海林に関する展示資料は８点であるが、バイオリンや楽譜、レコードを展示することで、音楽家としての側面が看取できる内容となっているのである。

以上のように東海林太郎音楽館では、東海林に関するあらゆる資料の収集、展示がなされている。展示資料も多岐にわたり、単なる音楽家としての側面のみならず、人間性の表出する資料が展示されているのである。また、秋田県立博物館においても、秋田県を代表する偉人として東海林が認識され、展示がなされていることが窺えるのである。しかし、博物館における常設的展示だけでは、次世代に音楽家の功績を継承するには、視覚情報に頼らざるを得ないという点で不十分であり、展示に加え他の顕彰活動を並行して行う必要があるのである。

（２）東海林太郎の顕彰碑

東海林は全国各地を舞台にした楽曲を歌唱しており、各地に歌碑も建立されている。大阪府大東市の「野崎小唄」の歌碑[17]や滋賀県大津市の「琵琶湖哀歌」の歌碑[18]がその例である。しかしながら、これらは「ご当地ソング」として歌の舞台となった地に建立されており、歌手に焦点が当てられたものではないため、音楽家顕彰のための歌碑とは性格が異なっている。

秋田市内には、1975年に設立[19]された東海林を顕彰する胸像と代表曲の一つである「母に捧ぐる唄」の歌碑が建てられている[20]。像の前に立つとセンサーが反応し、東海林の代表曲６曲が順番に流れる仕組みとなっている。胸像と歌碑は、敷地内に久保田城跡のある千秋公園の入口に立地しており、人々の目に入りやすい位置にある。また、付近には東海林の生家にあった石灯籠とケヤキの木が保存されており、所縁の地であることを示している。以上のように、東海林の場合、歌碑や胸像の設置により、郷土の歌手であることを人々に認識させるのみならず、実際に生家に置かれていた石灯籠やケヤキの木を保存することで、東海林をより身近に感じることができるのである。このように、顕彰碑や生家の石灯籠、ケヤキの木が、人々の目に入りやすい場所に所在しているため、地域の人々だけでなく観光客にも、秋田市出身の歌手として東海林のことを知らしめることが可能なのである。

（３）東海林太郎の顕彰イベント

イベントには前章で述べたように、演奏会や講演会等が含まれる。また、常設ではない短期的な展示についても、イベントとしての性格が強いため、イベントの一

つに含めることとする。秋田県内での東海林太郎を顕彰するイベントはほぼ毎年開催されているが、本項では具体例を３例紹介し、その特徴について考察する。

１例目は、1998 年に大々的に行われた「東海林太郎百年祭」である。まず、東海林の命日にあたる 10 月４日に「東海林太郎生誕百年祭 永遠のメロディー みんなで歌おう東海林太郎」[21] が開催された。これは東海林の生誕 100 年を記念したイベントであり、東海林の楽曲の歌唱者を募集し、応募者が舞台で東海林の楽曲を歌唱し、東海林の楽曲を通じて歌の素晴らしさを広める目的のもと開催された。また、同年の東海林の誕生日である 12 月 11 日には「東海林太郎生誕百年記念 東海林太郎音楽祭」[22] が開催された。このイベントの第一部では「東海林太郎 永遠のメロディ」と題した作曲家・三枝成彰氏のトークショーが、第二部では東海林所縁の歌手による歌謡ショーが行われ、東海林を偲ぶ内容となった。参加者は、第一部では知識として東海林に関する情報を得ることができ、第二部では歌を聴くことで感覚的に東海林の楽曲に親しめることができたのである。先述の東海林の生家に設置されていた石灯籠とケヤキの木も、この年に合わせて寄贈されており、生誕 100 年の節目の行事として、単に東海林の歌の歌唱や講演会を行うのみならず、東海林所縁のものにもスポットを当てて顕彰機運を高めていたことが看取できる。

２例目は、2002 年８月３日、４日、６日に秋田市立図書館「明徳館」内のホールで開催された「東海林太郎資料展示会」[23] である。この展示会では、東海林直筆の資料や胸像原型、レコード、写真等が展示され、館内では随時 CD やレコードで東海林の楽曲が再生された。図書館内のホールで開催されたため、展示資料は少なかったと推測できるが、当時は東海林太郎音楽館の設立前であったため、東海林の一次資料を目にすることのできる貴重な機会であったと考えられる。秋田市立図書館「明徳館」は、敷地内に先述の東海林の生家に設置されていた石灯籠とケヤキの木が設置、植樹されており、東海林との関係性の深い施設である。故に東海林と郷土を結び付けた展示を効果的に行うことのできる環境にあったのである。

３例目は、2014 年 10 月４日、５日に東海林の命日に合わせ「第 29 回国民文化祭・あきた 2014」の事業として開催された「東海林太郎音楽祭」[24] である。この行事ではまず、４日に「東海林太郎〈歌の供養祭〉」と題した演奏会と東海林の生涯を描いた物語の朗読が行われ、５日に「人間東海林太郎を語る」と題したシンポジウム、東海林の楽曲を応募団体が歌唱する「みんなで歌おう東海林太郎」、東海林所縁の歌手による歌謡ショー等が行われた。東海林を顕彰する催しは毎年行われているが、2014 年に行われた「東海林太郎音楽祭」はあらゆる内容から構成され、多角的に東海林について知ることができるという特徴がある。まず、「東海林太郎〈歌の供養祭〉」と題した演奏会では、東海林の出身校校歌の合唱と、代表曲の合唱

が行われた。出身校の校歌を合唱することで地域との関係性を認識でき、代表曲を合唱することで東海林のことを知る世代は歌を通して当時を懐かしむことができる。また、朗読は東海林の生涯を描いた内容のため、東海林の人生について、物語を通じて知識として情報を得ることができ、更に翌日のシンポジウムでは、東海林の人間性や内面について事実を認知できる。このように、イベントを通じ多様な観点から東海林について迫ることができ、東海林の功績を人々に印象付けることが可能となるのである。また、このイベントの特筆すべき点として、国民文化祭に合わせ、自治体が主導的立場から実行委員会を組織した点が挙げられる。例年の東海林顕彰行事と異なり、2014年は国民文化祭が秋田県で開催されたことから、その一環として「東海林太郎音楽祭」が開催されたと考えられる。自治体が運営に携わることで、歌謡ショーや東海林の代表曲を合唱する企画のみならず、幅広く東海林の功績を伝える企画が実現し、より地域振興に力を入れることができたと推察できるのである。

以上のように、東海林顕彰のイベントを３例紹介したが、それぞれのイベントでも開催企画を、昔を懐かしむ意味合いを有する「歌の鑑賞」、知識として東海林の情報を得るための「講演・展示」の大きく２点に大別できることが解る。この両者を組わせることで、歌手・東海林太郎の実像をより立体的に視認できるのである。

（４）東海林太郎顕彰の特徴

東海林太郎顕彰の特徴として、歌手としての側面のみならず人間性や足跡を辿れる試みがなされている点が挙げられる。東海林太郎音楽館で配布されているリーフレットには、周辺地図に「東海林太郎音楽館」「東海林太郎銅像」「東海林家の石灯籠」の他、「生家跡」「太郎少年が登った松」[25]も記されており、東海林所縁の地が身近にあることを知ることができる。東海林太郎音楽館の展示資料は音楽の専門的資料の他にも、人間性を示す資料も数多く展示されているため、所縁の場所を歩き、資料を鑑賞することで、地域所縁の人物として東海林のことを学ぶことができるのである。更にシンポジウム等の実施により、東海林の内面についても理解を深めることができ、東海林の生き方そのものを様々な顕彰活動から多角的に捉えることができるのである。

また、流行歌は時代を映す鏡であり、歌を同時代の社会や文化と結び付けて覚えている人々も数多い。そのため、東海林太郎の歌を知る世代にとっては、博物館における直筆の楽譜や歌詞の展示やレコードの演奏は、東海林のことを懐かしむばかりでなく、自らの過去を想起させるツールとしての役割を果たし、展示資料を通じ、時代性や社会的背景をも表出させることが可能となるのである。イベントにお

ける東海林の楽曲の演奏も同様の意味合いを有しており、東海林の顕彰が過去を投影する役割も果たすのである。

一方で、若年層に東海林の功績を知らしめ次世代に継承するという観点から顕彰活動を検証すると、課題が残っていることが解る。馴染みのない歌手の馴染みのない楽曲について理解を促す展示では、それをきっかけに興味を持たせることは難しい。本章では、「東海林太郎音楽祭」の中で、東海林の出身校校歌の歌唱が行われたことに触れた。若年層であっても、東海林と同じ出身校の人々が校歌を通して、先輩にあたる東海林のことに興味を持つことは考えられる。しかし、校歌や出身校は、東海林に親近感を抱く糸口になり得るが、その効果は限定的であり、全ての若年層の人々に継続的に東海林に対する興味を抱かせることは困難なのである。以上のように、東海林の顕彰活動は、関心を持った人々にはより内面を深められるよう手厚く行われているが、顕彰活動への新たな参加者を獲得しにくいという現状があり、東海林のことを知らない世代にも、興味を抱かせる工夫が必要となるのである。

３．上原敏顕彰の取り組み

（1）上原敏関係資料の展示

上原に関する資料を常設的に展示する施設として、まず上原敏の資料展示室[26]が挙げられる。同室は製菓店・有限会社島内製菓の２階の一室にあり、関係資料が展示されている。2004 年に公開したが、大館上原敏の会会長を務め、資料の収集を行っていた島内冨一氏の死去に伴い、現在では基本的に一般への公開は行われなくなった。開館当初、展示資料室は新聞記事において以下のように紹介されている。

> 会社２階の部屋には 40 枚ほどの上原の写真、鎌倉市の画家が描いた約 20 枚のポスター、歌詞をしたためた書、書類や手紙のコピーなどが所狭しと飾ってある。舞台衣装の黒のタキシードは上原夫人から贈られた。20 枚近いレコード盤は奈良市の人が寄せてくれた。[27]

現在も、資料室内では開館当初とほぼ同様の資料が展示されている。写真は、少年時代、兵隊さん時代、芸能人時代等、７区分されており、テーマ毎に上原の足跡を辿ることが可能である。また、レコード、ポスター等が整理の上展示されており、資料の種類毎に鑑賞しやすい環境が整えられている。加えて、上原着用のタキ

シードやサイン色紙等も展示されおり、実際に上原の歌手時代の面影に触れることができるという点で意義深い。中には、1937年12月に上原によって書かれたと思われる「流転」の歌詞とサイン色紙も残されており、年代から時代的背景を看取することも可能である。

また、大館郷土博物館の先人顕彰コーナーにおいても、常設的に上原の資料が展示されている[28]。大館郷土博物館では、上原敏使用映画台本1点、SP版レコード7枚、ブロマイド2枚、直筆サイン色紙1枚の計11件の上原敏関係資料を収蔵[29]しているが、2014年7月30日現在、そのうち上原敏使用映画台本1冊、SP版レコード1枚、ブロマイド2枚のみ常設的に展示されている状況である。殊に、直筆サイン色紙は、1937年12月に上原によって書かれたと思われる「鴛鴦道中」の歌詞が記されており、書かれた時期は上原敏の資料展示室で展示されていた「流転」の色紙とほぼ同時期であると考えられる。1937年は、上原がヒット曲を多数歌い、第一線で活躍し始めた節目となる年であることから、文化的価値は高いと言える。上原は東海林と異なり、活動期間が短いため資料の絶対数は少ないが、俳優としての活動を示す映画台本やサイン色紙等、我が国の音楽史における貴重資料が展示されているという点で意義深い。

以上のように、上原の資料を常設的に展示している施設は、上原敏の展示資料室と大館郷土博物館があるが、一般に公開している施設は大館郷土博物館のみである。展示資料室は一般へは公開されていないものの、資料は整理されているため、死蔵させないためにも、定期的に公開されることが望まれる。一方、大館郷土博物館では展示されている上原の資料は4点のみであり、そこから上原に関する情報を多く得ることは難しい。しかしながら、映画台本、サイン色紙等、貴重資料が揃っているため、資料を活用し、その時代性や社会性を看取できる展示を行うことも可能である。また、上原は東海林と比して活動期間が短く資料数が少ないため、本章第3項において取り上げるイベント事業との連携が極めて重要となるのである。

（2）上原敏の顕彰碑

上原の顕彰碑は、大館市役所に隣接する桂城公園内に1976年に建立された。顕彰碑には上原の生涯と顕彰碑建立の趣意、経過等が記されている他、「妻恋道中」の歌詞も彫られており、上原を偲ぶことができる。桂城公園は大館市の中心部に位置し、訪れる人々の年代も幅広い。そのため、顕彰碑は上原の功績を人々に認知させるという点において、貢献していると言えるのである。また、上原の生家や出身校である大館中学校（現・大館鳳鳴高校）は、現在も残っており上原の足跡を確認することができる。しかし、いずれの場所においても案内板による表示はなされて

いないため、上原の功績を後世に伝えるためにも、上原所縁の地を顕示できる地域作りが求められるのである。

（3）上原敏の顕彰イベント

本項では、常設ではない短期的な展示についても、イベントとしての性格が強いため、イベントの一つに含めることとする。上原敏の顕彰イベントとして、まず、大館上原敏の会の活動が挙げられる。大館上原敏の会は、桂城公園内に顕彰碑が建立されたのを機に創立機運が高まり、1980 年に「郷土の生んだ偉大なる歌手「上原敏」の歌と其の人を愛し、高徳を偲び伝承する」[30] という目的のもと、設立された。以降、展示会の開催や、上原の楽曲による歌謡ショーの開催等、上原の功績を顕彰する活動を精力的に行っており、上原の命日にあたる 7 月 29 日には上原の顕彰碑前で慰霊祭・流転忌を開催 [31] し、上原を偲んでいる。没後 70 年にあたる 2014 年の流転忌では「約 40 人が参列」[32] し、「参加者たちは碑前に花束や地酒、本人の写真などを供え、代表曲「流転」と「裏町人生」を音楽テープに合わせて合唱」[33] し、上原の冥福を祈った。2014 年 7 月 29 日現在、57 名 [34] の会員がおり、上原の死去から 70 年が経過しているが今なお活発な活動が行われていることが窺える。

大館上原敏の会は過去には展示会にも携わっており、その例としてまず 1997 年 5 月 16 日～ 18 日にデパートの催事場で開催された「上原敏の時代展」が挙げられる。この展覧会について、詳細を窺い知ることはできないが、当時の新聞記事には以下のような記述がある。

> 会場には（中略）多くのファンが集まり、一時は身動きもとれないほど。全国から集められた写真や（中略）挿絵画家・植木金矢氏によるヒット曲のオリジナル画など、当時の流行歌の世界を物語る資料の一つ一つをていねいに鑑賞していた。（中略）蓄音機によるレコード演奏では、当時の上原敏の声が鮮明によみがえり、来場者らの感動を誘っていた。（中略）「唄の愛唱会」も行われ、多くのファンらが当時のヒット曲を合唱していた。[35]

このように、資料展示の他、レコード演奏や上原の楽曲の合唱等が行われ、視覚的な情報のみならず、聴覚情報を得られる工夫を行ったことで、来場者は上原の楽曲のヒットした時代を容易に回顧できたと考えられる。なお、この展示会は島内氏の収集した資料が中心となっており、植木氏のオリジナル画は、現在上原敏の資料展示室に展示されている。

次に、2000年7月28日、29日に大館上原敏の会創立20周年を記念してハチ公プラザを会場に開催された第2回「上原敏の時代展」が挙げられる。この催しでは、島内氏の収集した資料を中心に「愛用のタキシード、写真、ポスター、戦地からの手紙」(36) 等、約100点が展示された他、会員が上原の楽曲を披露する「上原敏歌謡ビッグショー」が実施された。1997年に開催された「上原敏の時代展」と同様、展示のみならず歌謡ショーも開催することで、より効果的に上原の活躍した時代を懐かしみ、より楽しく伝承できるのである。

また、2014年6月15日には、東海林と同様、国民文化祭と連動したイベント「上原敏を歌い継ぐ」(37) が開催され、上原の生い立ちや功績などの紹介を交え、秋田市内で大館上原敏の会による上原の代表曲の歌唱がなされた。このように、上原没後70年の節目の年である2014年には、大館市だけでなく、秋田市内でも国民文化祭の開催に合わせて行事が行われた。以上のように、大館上原敏の会では歌謡ショーを中心に、展示会を開催する等、活発な顕彰活動を行ってきたのである。

一方で、上原については東京でも上原敏の集いによる顕彰活動が行われており、定期的に集まり上原の歌を歌う等して偲んでいる。なお、以前は上原敏の会という名称であったが、規模の縮小に伴い現在では上原敏の集いに改称している。過去には上原敏の会主催の展覧会も開催されており、1993年7月17日～19日に上原の50回忌を記念して浅草公会堂において上原敏の会主催により開催された追悼展では、上原の写真、原譜等、約500点が展示された (38)。また、2008年5月20日～23日に浅草公会堂において上原敏の会主催により生誕百年記念展が開催されており、その際には、上原の写真 (39) の他、植木氏の描いたオリジナル画が展示の大部分を占めた。しかし、遺されている実物資料が東海林と比しても少ないことを考慮すると、植木氏によるオリジナル画を展示することで、上原の歌唱した楽曲に関するイメージが膨らみ、更にBGMとして上原の楽曲を効果的に取り入れることで、上原の楽曲の流行した頃の時代性を看取することができるのである。加えて、上原の歌唱した楽曲は、博徒を描いた股旅もの、戦地の兵隊が故郷へ向けて書いた手紙を描いた便りもの等、内容が幅広いため、各楽曲のオリジナル画を展示することで、上原の幅広い活躍を視認できるのである。

以上のように、上原敏の顕彰活動は大館と東京において活発に行われているが、上原のことを知る人々の高齢化という問題が発生しており、顕彰により若い年代にも上原のことを認知させることが課題として残っている。次世代に上原の功績を如何にして伝えるかという点が課題であるが、近年では、教育機関において上原を取り上げる動きがある。

その例として、まず2008年9月27日、28日に大館ショッピングセンターにお

いて開催された大館鳳鳴高校創立110周年記念特別企画「大中・鳳鳴人物展」が挙げられる。これは、大館鳳鳴高校が「旧制大館中学時代から現在までに輩出した各界の著名人の紹介や所縁の品、OBから提供された昭和初期の卒業証書や生徒手帳」(40)が展示された展覧会である。この展覧会では、卒業生の一人として上原が取り上げられ、上原の関係資料では、島内氏の収集した「在学中の写真のほか、女優で映画監督の田中絹代とのツーショット写真、愛用のタキシード」(41)が展示された。上原を郷土出身の先人としてのみならず、出身校の卒業生という視点から扱うことで、生徒が上原のことを容易に理解する工夫がなされたのである。

次に、2014年10月17日～26日に専修大学主催により、上原敏の集い、大館上原敏の会後援のもと学内のホールで開催された「太平洋に散った人気歌手～上原敏没後70年記念展～」が挙げられる。展覧会の趣旨には「上原敏の生涯を戦争という側面から取り上げるとともに、あわせて専修大学野球部第一次黄金期を支えた野球人・松本力治(42)の姿もご紹介します。」(43)と記されており、歌手としての側面のみならず、戦争、野球という切り口からも展示が行われたことが解る。展示コーナーは「松本力治、大館に生まれる」(44)「専修大学へ入学、野球部員として活躍」(45)「上原敏デビュー、一躍人気歌手へ」(46)「戦地への慰問、そして戦場へ」(47)の４つに分けられており、上原の生涯を追いながらも、野球、戦争という視点を盛り込み、多角的に当時の時代を投影させながら上原の実像を浮かび上がらせる展示が行われていたのである。また、会期中の10月18日にはイベントが開催され、専修大学文学部教授である新井勝紘氏、上原の長男である松本明夫氏、上原に関する著作を上梓した大西功氏による講演の他、上原敏の集いによる上原の楽曲の合唱が行われた(48)。このイベントで特筆すべきは、新井氏により「上原敏の軍事郵便について」というテーマで講演が行われた点である。軍事郵便に関する歴史学の講演を、上原が実際に執筆した軍事郵便を取り上げて行うことで、歴史学の観点から上原の人物像を探ることができるのである。

このように、近年は教育機関においても上原の展示や講演が行われており、若い世代に上原のことを知らしめる機会も設けられているのである。

（4）上原敏顕彰活動の特徴

上原敏顕彰の特徴として、大館、東京それぞれにおいて、積極的に顕彰活動が行われていることが挙げられる。歌謡ショーや展覧会を開催することで、上原の楽曲を知る人々の琴線に触れ、昔を懐かしむきっかけ作りの場としての役割を担っているのである。大館上原敏の会会長であった島内氏は、上原の資料を専門的に収集、展示、公開していた。島内氏没後は上原敏の会が主体となって展示が行われる機会

は少なくなったが、高校や大学等、教育機関において上原の資料を展示する機会も増えており、次世代への継承と云う観点から現状を顧みると、これは特筆すべきことである。また、上原は享年36歳でニューギニア島において戦死したため、戦後も活躍した東海林と比べても相対的に情報量は少ない。しかし、上原は専修大学野球部に在籍し主将を務めた際には「東都大学リーグで優勝」[49]を果たし、戦争に召集され南方を転戦する等、数奇な運命を辿っている。それ故、「太平洋に散った人気歌手～上原敏没後70年記念展～」のように、歌手としての側面のみならず、様々な視点から時代的背景や社会を捉えた展示も可能となる。2014年に没後70年を迎え、リアルタイムで上原敏を知る人々が少なくなっている現在、歌手としての上原の魅力を発信するのみならず、多様な観点から上原を映し出し、新たに興味を持つ人々を獲得する必要があるのである。

更に、上原の功績を後世に伝える上では、行政も積極的に顕彰活動に参画することが肝要であり、2011年には大館市議会において以下の質疑が佐々木公司氏により行われている。

> 先人顕彰にスポットを当てた観光の目玉にということでありますが、（中略）特に今回は戦前戦中の流行歌手であった上原敏について取り上げていきたいと思います。桂城公園にもその碑がありますし、現在、大館市の菓子店の２階に上原敏の資料室があります。かつて、それを資料収集した島内氏が亡くなり、その後の活動が若干弱くなっておるように思いますが、せっかくのあれだけの資料をもっと活用し、大館の先人にスポットを当てて、こんな人たちが大館にいたということを前面に出し、私たちが元気をもらい、そして大館に来た人たちにそのことを紹介するということがある意味では観光にも大いにつながるのではないかと考えますので、そのことについてお尋ねをいたします。[50]

それに対し、大館市長・小畑元氏は以下の通り回答している。

> 議員御案内の上原敏につきましては、貴重な資料が島内菓子店に保管されているとのことでありますので、郷土博物館での展示等に活用させていただき、多くの市民や観光客の皆様に紹介したいと考えております。[51]

上原の資料の活用に関する質問に対し、市長は郷土博物館で活用する方向性を示している。先述の通り、現在大館郷土博物館における上原敏の展示資料は４点のみであるが、市民のみならず、訪れた観光客にも上原顕彰の輪を広めることが地域活

性化へ繋がるため、地域と協働した恒常的な顕彰活動が求められるのである。

4．まとめ

戦前から戦後にかけて活躍した東海林と戦前活躍した上原の事例を紹介したが、いずれの例においても、積極的に顕彰活動が行われていることが看取できるが、顕彰活動参加者の高齢化が問題となっており、次世代への継承という課題に直面している。この課題を解決する方法の一つとして、教育機関における啓蒙活動の実施が挙げられる。清水みのるの部屋では、小学校内に顕彰スペースを設けることで、小学生のうちから郷土の偉人として流行歌の作詞家である清水の存在を認知できている。それ故、地域住民が郷土の音楽家顕彰に参画できる体制を整えるには、教育機関における顕彰活動の推進が求められるのである。現在、小学校学習指導要領には「郷土を愛し」(52) という文言が含まれている他、中学校学習指導要領には「地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し，社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め，郷土の発展に努める。」(53) という一文が明記されている。教育の一環として郷土の流行歌に携わった音楽家について学習することで、地域と音楽家の関係性を理解でき、次の世代にも、音楽家の作品を継承することが可能となる。故に、教育機関を中心に地域と密着した音楽家顕彰の体制を確立することが、次世代へ音楽家の功績を伝えるために必要となる。郷土の偉人として音楽家を捉えることで、教育機関においても、間接的に児童、生徒に昔の流行歌に対する興味を持たせる仕組みが創出できるのである。また、上原の事例にもあるように、歌手としての活躍のみを伝えるのではなく、「大館中学校出身の上原」「専修大学出身の上原」という学校との関係性を提示したり、「野球選手としての上原」「兵隊としての上原」という多様な分野から上原の人間像に迫ったりすることで、人々の関心の輪をより広げることができるのである。東海林についても同様であり、東海林太郎音楽館の展示にあるように、音楽資料のみならず、南満州鉄道株式会社に勤務していた頃の資料、私生活での交友関係を示す資料、日常生活で使用していた資料等、人間味の溢れる展示を行うことで、より人間像に迫ることのできる演出ができるのである。東海林と上原の例を挙げて顕彰活動について検証したが、この二人に限らず流行歌に携わる音楽家の顕彰活動の根を絶やさないためには、音楽以外の視点からのアプローチも必要となる。同一の資料を展示する場合であっても、視点を変えることで引き出すことのできる情報も多様化する。故に音楽家の資料であっても、歴史学、社会学等あらゆる視点を取り入れた構成を行うことで、より多くの人々が関心を寄せる環境を築くことができるのである。それ故に音楽家としての活躍を前面に

押し出す展示も、音楽家としての生き様を深く理解できるという点で有用であるが、多様な切り口から学際的展示を行うことで、新たに興味を持つ人を獲得し易くなる。そして、展示を足掛かりとして、その他のイベントを展開することで、人々の興味、関心の輪を広げることが音楽家への理解促進に繋がり、地域活性化の糸口となるのである。加えて、市民のみならず、観光客も、顕彰碑や生家跡等、音楽家所縁の地を巡ることで、地域と協働した顕彰体制が形作られていくのである。そのためにも、より多くの人々が顕彰活動の重要性を認識し、地域や教育機関と連携した活動を行う必要があるのである。

おわりに

歌は単なる娯楽ではなく、世相を映す存在でもある。それ故に、流行歌手に関する資料を展示する際には、その歌手に関する資料を単に提示するのではなく、その歌手の活躍した時代に触れ、当時の社会を理解させることで、より深くその歌手のことを知ることができるのである。時代とともにその歌手のことを知っている人の絶対数は減るため、顕彰活動を継続的に行うには、新規に興味を持つ人を獲得する必要がある。そのためにも、マニアックな資料を多数展示することで、興味のある見学者にとっては、歌手としての内面を理解できる展示を行う一方で、若年層にも昔の流行歌に興味を抱かせる活動を多角的視点により行うことが肝要である。本稿で取り上げた東海林太郎と上原敏の顕彰活動は、共に積極的に行われており、地域住民の努力により今なお郷土の歌手として地域から愛されている。流行歌はその性質上、時代と共に人々の記憶から薄れていく宿命にあるため、今後も顕彰活動の輪を広げていくためにも、自治体レベルから個人レベルに至るまで、各組織、個人がきめ細かい活動を実施し、それを拡充させることが求められるのである。

最後になりますが、本稿執筆に際し、大館上原敏の会、上原敏の集い、有限会社島内製菓、東海林太郎音楽館、秋田県立博物館、大館郷土博物館をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。現地調査を通じ、各地で大変お世話になりましたこと、感謝の念に堪えません。ありがとうございました。

註

（1）「東海林太郎」、岩間芳樹 1984『一唱民樂』東海林太郎歌謡芸術保存会
（2）大館市史編さん委員会編 1981『大館市史』4 大館市
（3）拙稿 2012「音楽博物館の分類と提唱」『博物館学雑誌』37(2) 全日本博物館学会 pp. 47-63
（4）2013年9月6日見学。

（5）　浜松市立伊佐見小学校 1989『熱き思いで浜名湖を…… 清水みのるの部屋 開設記念集』浜松市立伊佐見小学校
（6）　2012 年 8 月 10 日訪問。
（7）　日本昭和音楽村 写真展の展示作品募集 http://www.city.ogaki.lg.jp/0000021395.html（2014 年 10 月 19 日閲覧）
（8）　2013 年 9 月 7 日見学。
（9）　2012 年 9 月 19 日、2014 年 7 月 27 日見学。
（10）　2005. 08. 03「東海林太郎 愛用品ズラリ 音楽館オープン」『朝日新聞』秋田朝刊 pp. 27
（11）　菅原潤 2014. 06. 26「東海林太郎が練習で使用 妻所有のピアノ音楽館に寄贈「国文祭へ弾みつく」」『秋田魁新報』朝刊 秋田魁新報社 pp.25
（12）　津村豊和 2005. 08. 09「雑記帳：「赤城の子守唄」「国境の町」で…」『毎日新聞』東京朝刊 pp. 31
（13）　津村豊和 2006. 06. 30「雑記帳：えんび服と直立不動の歌唱で知られる…」『毎日新聞』東京朝刊 pp. 31
（14）　2012. 06. 16「音源など大量に寄贈 保存会長遺品、音楽館に」『読売新聞』秋田朝刊 pp. 30
（15）　東海林太郎音楽館への聞き取り調査による（2014 年 7 月 27 日実施）。
（16）　2014 年 7 月 27 日見学。
（17）　2009 年 8 月 18 日訪問。
（18）　2009 年 8 月 19 日訪問。
（19）　東海林太郎胸像 http://www.city.akita.akita.jp/city/ur/pc/sensyukouen/Presentation/taro.htm（2014 年 10 月 19 日閲覧）
（20）　2014 年 7 月 27 日訪問。
（21）　東海林太郎生誕百年祭実行委員会 1998「東海林太郎生誕百年祭 永遠のメロディー みんなで歌おう東海林太郎」チラシ 東海林太郎生誕百年祭実行委員会
（22）　東海林太郎生誕百年祭実行委員会 1998「東海林太郎生誕百年記念 東海林太郎音楽祭」チラシ 東海林太郎生誕百年祭実行委員会
（23）　東海林太郎顕彰会 2002「東海林太郎資料展示会」リーフレット 東海林太郎顕彰会
（24）　第 29 回国民文化祭秋田市実行委員会 2014「～つなごう東海林太郎の人と歌～東海林太郎音楽祭」チラシ 第 29 回国民文化祭秋田市実行委員会
（25）　東海林太郎音楽館「東海林太郎音楽館」リーフレット 東海林太郎音楽館
（26）　2014 年 7 月 28 日見学。
（27）　2005. 08. 19「戦争に散った人生たどる 大館出身・歌手の上原敏 大館の島内さん資料を集め展示 写真・衣装・ポスター…」『朝日新聞』秋田朝刊 pp. 29
（28）　2014 年 7 月 30 日見学。
（29）　大館郷土博物館 収蔵品検索 http://odate-city.jp/museum/（2014 年 10 月 19 日閲覧）
（30）　大館上原敏の会編 1991『創立十周年記念誌 歌手上原敏 彗星のごとく』大館上原敏の会
（31）　2014 年 7 月 29 日、慰霊祭「流転忌」参加。
（32）　2014. 07. 30「流転忌 敏さんの歌いつまでも 大館市の桂城公園で郷土の名歌手偲ぶ」『おおだて新報』朝刊 pp.7
（33）　2014. 07. 30「上原敏没後 70 周年 代表曲合唱し冥福祈る「顕彰碑守り、業績後世に」東京の大学院生も参加 出身の大館市で慰霊祭」『北鹿新聞』朝刊 pp. 9
（34）　大館上原敏の会 2014「平成 26 年度総会」配布資料 大館上原敏の会
（35）　1997. 05. 17「よみがえる「上原敏」その時代展「長年の夢がかなった」往年のファン多数来場 蓄音機演奏などに人気」『北鹿新聞』朝刊
（36）　2000. 07. 29「人気歌手・上原敏しのび、ファンら熱唱 大館で「時代展」／秋田」『朝日新聞』秋田朝刊 pp. 31
（37）　国民文化祭サテライトセンター 2014「上原敏を歌い継ぐ」チラシ 国民文化祭サテライトセ

ンター
(38)　1993. 07. 18「雑記帳：戦死した上原敏さんの50回忌記念で追悼展」『毎日新聞』東京朝刊 pp. 27
(39)　2008. 05. 23「昭和の人気歌手「上原敏」記念展 浅草、きょうまで」『朝日新聞』東京朝刊 pp. 31
(40)　2008. 09. 28「110周年記念 上原敏など12人紹介＝写真やゆかりの品々並べ＝いとくSCで大中・鳳鳴高人物展始まる」『おおだて新報』朝刊 pp. 7
(41)　註45に同じ。
(42)　松本力治は上原敏の本名である。
(43)　専修大学 2014「太平洋に散った人気歌手～上原敏 没後70年記念展～」リーフレット 専修大学
(44)　註43に同じ。
(45)　註43に同じ。
(46)　註43に同じ。
(47)　註43に同じ。
(48)　註43に同じ。
(49)　大西功 2012「空前の人気歌手 上原敏波乱の人生を追う」『ニュース専修』504 専修大学広報課 pp. 6
(50)　大館市　2011. 06. 07『大館市議会会議録 平成23年6月定例会第3日目』大館市
(51)　註50に同じ。
(52)　文部科学省 2008『小学校学習指導要領』文部科学省
(53)　文部科学省 2010『中学校学習指導要領』文部科学省